

本部委員会の審議内容

公益社団法人 鉄道貨物協会

利用促進委員会(H27.7.15)

平成27年度第3回利用促進委員会では、次の2項目について審議を行った。

1. 年間テーマ「鉄道コンテナ輸送の利用促進に向けた業種別の利用実態把握・課題の抽出と提案Ⅱ」

【審議内容】

A. アンケート調査の実施状況について(中間報告)

(1) アンケート調査の実施

鉄道コンテナ輸送を利用している各業種における利用実態や利用拡大に向けた課題・要望等を把握するため、アンケート調査を実施した。

(2) 調査の対象と回収率

a. 荷主企業(物流子会社、特別積合せ運送事業者を含む)
鉄道貨物協会の会員のうち、合計で366件の事業所を対象に調査を実施し、7月15日現在146件の回答を得た。

b. 利用運送事業者
鉄道貨物協会の会員のうち、合計で95件の事業所を対象に調査を実施し、7月15日現在、62件の回答を得た。

B. 今後の調査について

アンケート調査の集計を完成させたうえで、アンケート調査結果の補正として、荷主企業と利用運送事業者にヒアリング調査を実施する。

2. サブテーマ「定温(温度管理を必要とする)コンテナ輸送需要およびインフラ整備に関する調査研究」

【審議内容】

A. アンケート調査の実施

定温(=温度管理を必要とする)コンテナ輸送のニーズがあると推測される農産品出荷団体、加工食品メーカー、化学薬品メーカーなどにおける定温コンテナの利用実態ならびにニーズ(潜在需要)を把握するため、アンケート調査を実施した。

B. 調査の対象と回収率

農産品出荷団体、加工食品メーカー、化学薬品メーカー合計で115事業者を対象に調査を実施(注:「調査対象外」との返答があった事業者などは対象件数から除外)し、25件の回答を得た。

C. 調査項目

(1) 長距離区間における定温輸送の利用状況(輸送区間、輸送モード、品目、管理温度帯、平均的な月間の発送量)

(2) 鉄道コンテナによる定温輸送にかかる利用意向および理由

(3) 現在は鉄道コンテナによる定温輸送を利用していないが今後利用してみたいと回答した事業所における、利用したい輸送区間、品目、管理温度帯、コンテナサイズ別の重量、容量

(4) 鉄道コンテナによる定温輸送を利用する(または利用を増加する)ための条件、ニーズ

D. 調査結果の概要(一部を抜粋)

(1) 長距離区間における定温輸送の利用状況

a. 品目別・輸送モード別の月間発送量

回答頂いた事業者が定温輸送している貨物に関する、品目別・輸送モード別の月間発送量は、表1-1、1-2のとおりである。

表1-1 品目別・輸送モード別の月間発送量(食料品)

食料品発送合計	トラック	鉄道コンテナ	海運	トラック・鉄道
49,405トン (モード別割合)	42,124トン (85.3%)	2,563トン (5.2%)	1,568トン (3.2%)	3,150トン (6.4%)

注)「海運」はフェリーを含む。「トラック・鉄道」は両者の併用。

表1-2 品目別・輸送モード別の月間発送量(化学工業品・化学薬品)

化学工業品・化学薬品発送合計	トラック	鉄道コンテナ	海運	トラック・鉄道
1,163トン (モード別割合)	670トン (57.6%)	473トン (40.7%)	0トン (0.0%)	20トン (1.7%)

注)「トラック」はタンクローリーを含む。「海運」はフェリーを含む。「トラック・鉄道」は両者の併用。

b. 品目別・輸送区間別の月間発送量

発地域についてみると、食料品では九州発が14,831トンで全体の30.0%を占め、次いで、北海道発の11,500トン(23.3%)が多い。なお、九州発の品目では約9割が青果物であるのに対し、北海道発の品目では大半を乳製品が占めている。

また、化学品については九州発385トン(33.1%)、四

国発300トン(25.8%)、近畿発230トン(19.8%)などが多い。

c. 輸送区間別・輸送モード別・品目別の管理温度帯

回答頂いた事業者が定温輸送している貨物に関する、輸送区間別・輸送モード別・品目別の管理温度帯は、品目(あるいは季節など)により大きく異なっている。食料品のうち青果物については、概ね7℃から15℃程度であるが、一部に5℃以下という場合もある。乳製品については、概ね1℃~10℃であるが、濃縮乳では-23℃以下となっている。加工食品については、冷凍食品では-25℃、大豆食品では-18℃とマイナスの温度帯で発送される一方で、チョコレートは5℃での発送である。また、食品素材(大豆素材、油脂)については5℃となっている。

以上のように、食料品に関してはマイナスまたは低い温度帯での発送が中心である一方で、化学工業品・化学薬品の管理温度帯にはかなりの幅がある。農薬が-5℃以下であるのに対し、医薬品は10℃、化粧品、工業薬品、工業原料は10℃から30℃くらいの温度帯が中心となっているが、中には15℃~40℃、あるいは40℃~50℃など高温で発送されているものもある。また、工業原料の中には、-20℃~-10℃という温度帯のものもある。

(2) 鉄道コンテナによる定温輸送にかかる利用意向および理由
鉄道コンテナによる定温輸送にかかる利用意向については表2のとおりである。

表2 鉄道コンテナによる定温輸送にかかる利用意向

選択肢	件数(%)
すでに利用しており、今後利用を増やしたい	5件(20.0%)
すでに利用しており、今後も利用量は大きく変化しない	8件(32.0%)
すでに利用しているが、後は利用を減らしたい	3件(12.0%)
以前利用したことがあるが、現在は利用していない	1件(4.0%)
現在は利用していないが、今後、利用してみたい	5件(20.0%)
現在利用しておらず、今後も利用するつもりはない	1件(4.0%)
分からない	1件(4.0%)
その他	1件(4.0%)
合計	25件(100%)

「すでに利用しており、今後利用を増やしたい」と回答した理由についてみると、「省エネ促進」「トラックドライバー不足対応」「運賃の抑制」「温調輸送の製品拡大が見込まれる(注:温調コンテナ代替となる同機能を持ったコンテナ類の増強を希望)」のほか、「鉄道コンテナの輸送枠が少ないため、現状ではトラックで輸送している」(注:鉄道コンテナ輸送を利用したくても利用できない)ことが挙げられている。

「すでに利用しており、今後も利用量は大きく変化しない」と回答した理由についてみると、「品質の維持のため温度管理が必須」であることから一定の需要があるなかで、「輸送必要量を既に充当しているため」「生産者の減少など懸念材料があり、大きく変化しないが、減少の傾向」「温度管理の必要な製品の出荷が増える情報は入っていない」ため、利用量は現状維持との回答となっている。

「すでに利用しているが、後は利用を減らしたい」と回答した理由についてみると、「定温コンテナの製造メーカーが撤退」「コストが高い」ことが挙げられている。

また、「以前利用したことがあるが、現在は利用していない」と回答した理由については、「輸送枠に制限がある」「鮮度保持が十分でない」「延着が多い」など鉄道コンテナ輸送自体にかかる課題が挙げられている。

一方、「現在は利用していないが、今後、利用してみたい」と回答した理由についてみると、「モーダルシフトの推進」「冬場の東北・北海道への輸送手段の検討」のほか、「現状では温度管理が必要な貨物にかかる鉄道コンテナ輸送の需要は無いが、今後発生する可能性がある」「温度管理が必要な案件の見積もり自体はあるが、料金やコンテナの確保に関する課題のため実現しなかった」といった意見が聞かれた。

E. 今後の調査について

定温コンテナ輸送需要を把握するための補正として荷主企業へ、またインフラ整備に関する調査としてコンテナ製造メーカー、定温コンテナを運用する利用運送事業者などにヒアリング調査を実施する。